

『上海』 〈死〉 論——参木
の意識を通して——

かえで

『上海』という物語は登場人物の一人である参木の〈死〉に対する意識の変遷を描いたものであると言えるだろう。参木の〈死〉への希求はテキスト第一章において、故郷の母と自らの〈死〉を思うことから始まる。

参木はひとりになると、ベンチに凭れながら古里の母のことを考えた。その苦労を続けて、なおますます優しい手紙を書いて来る母のことを。――彼はもう十年日本へ帰ったことがない。その間、彼は銀行の格子の中で、専務の食った預金の穴をペン先で縫わされていただけだった。彼は、忍耐とは、此の生活の上で、他人の不正を正しく見せ続ける努力にすぎないと云うことを知り始めた。そうして、彼はそれが馬鹿げたことだと思ふ以上に、いつの間にか、だんだんと死の魅力に牽かれていった。彼は一日に一度、冗談にせよ、必ず死ぬ方法を考えた。それが最早や、彼の生活の、唯一の整理法であるのように。

参木は故郷の母、それもますます優しい手紙を書いて来る母のことを思いながら、〈死〉への魅力へ牽かれていく。この章のみにおいてみれば彼のこの死への欲動は、上司の不正を隠匿するという馬鹿げた行為から発せられたかのように書かれているが、これは断片にすぎない。そして参木は「自分の上司を憎むことが、彼自身の母国そのものを憎んでいるのと同様の結果になると云うことについては、忘れて」いる。この憎しみは彼の上司を飛び越えて、日本という国家に向けられているのである。この憎しみが彼を、やさしい手紙を書いてくる母のいる日本へ十年も帰らせていない。参木の憎しみは、彼自身にも向けられることになり、それはついに母国を否認することになる。そしてこの憎しみは参木自身に多大な影響を及ぼすようになる。それが、彼の「唯一の整理法」である自分自身の殺害方法について考えることにつながる。

参木という人物は〈死〉というものについて積極的に考えているようで、その〈死〉に求めるものは実に曖昧である。参木はテキスト三四章において〈死〉と直面する。そしてそのとき彼の中では「幾度となく襲っては退いた死への魅力が、煌めくように彼の胸へ満ち初め」るのである。そして物語は数々の無名の〈死〉を描き出し、〈死〉が確実に参木の元へ肉薄していることを示す。つまり、このときの彼に訪れる〈死〉というのは参木という一個人を全く無視したものであり、無意味な死体の山の一部になり果てることを意味している。その死体は参木でなくとも誰でも良いのであり、そこに固有の名前のある死体は存在しない。

大量死というものについて、第一次大戦（一九一四～一九一八）が与えた影響から笠井潔は次のように述べている。

平和と繁栄を無責任に謳歌し刹那的な歓楽に酔いしれる群衆は、進歩と向上をめざす一九世紀的な市民の理念から自墮落に逸脱していった。大量死の死者は人間的な尊厳を剥奪されたのだが、世界戦争を生き延びた生者もまた死者と同様、無意味であるしかない匿名の群衆と化したのである。（『探偵小説と二〇世紀精神 ミネルヴァの梟は黄昏に飛びたつか？』東京創元社 笠井潔）

人間的な尊厳を剥奪された死者となることを明確に感じつつ、参木は「にやにやと笑い出」すのである。このときの参木にとって〈死〉というものに対して何一つとして意味を見出していないのである。この瞬間、参木は参木であることを放棄する。つまり、ここにおいて参木に訪れる〈死〉とは、統計上の数字に過ぎず、そこに参木という個人は一切存在しない。多数の死者の中にあるひとつの死者に注目する者はおらず、ただ物同然のごとく処理されるのである。

しかし、参木は三九章において「僕は愛国主義者だから、同じ死ぬなら国のために死のうと思」うことで、自らの〈死〉の意味づけを行おうとする。この一見すると大きな変化であるが、しかし参木は明確に「国のため」と言い放つ。つまり、ここにおいても参木は自らの〈個人の死〉というものについては無関心なのである。

〈個人の死〉とは暴動や戦争によって不意に、偶然そこに居合わせたために生産される無数の〈死〉ではない。これは参木という個人を対象として、何者かによって明白な理由をもってもたらされる〈死〉のことである。再び笠井の言を借りれば「人格も個性もなく、ゴミのように大量に抹殺されてしまう」（『探偵小説論 1 氾濫の形式』東京創元社 笠井潔）。

そして、この〈個人の死〉に対する無関心さは冒頭から連続している。ここで、山本亮介の論を援用したい。

和辻倫理学においては、個と全体の弁証法的運動をモデルとしつつも、観念的な「絶対的否定性」と具体的な「全体」の意義を同一視することで、個に対する全体の優位を説くことにな

っている。この構図は、国民としての去私没我に倫理を帰着させるものであった。全体性を基盤とする既存の「間柄」にピタリと一致するわけでない参木は、一面において、「全体」に包摂されることを拒否し、どこまでも「個」にとどまる志向を持っているように思われる。参木は冒頭から（中略）自己の「死」について想起を繰り返している。このことは、「俺が死んだら、だいいち俺が困るぢやないか」との言葉が象徴するように、「個」であることを強く自覚し、「個」としての領域を確保するための方途とみなすことができるだろう（ただし、それもまた「日本人」としての「死」を意味することとなり、参木の「死」への意識はさらに複雑な様相を帯びていく）。（『横光利一と小説の論理』 笠間書院 山本亮介）

参木は「俺が死んだら、だいいち俺が困るぢやないか」という理屈でもって個であることを主張するが、それは日本人という所属に帰属することと違いはない。参木にとっての〈死〉というものは全編にわたって集団の中の〈死〉でしかなく、固有の尊厳ある死は存在しえないと言えるだろう。また、恐らく参木は芳秋蘭に対して特別な感情を抱いている。この特別な感情というのは、愛そのものではないだろう。

中国人である芳秋蘭との深い関係を望むということは、彼の日本人という枠さえも喪失させかねず、それは参木が「全体に『包摂』される」契機ともなりえるのではないだろうか。それは、日本人である競子やお杉にはない芳秋蘭のみが持つ特質である。ゆえに参木が芳秋蘭に対して抱く感情というものは、競子やお杉に抱くような愛とは異なる、特別なものになりえるのである。参木は女性を通じることによって自らの〈死〉に対する意味を変化させていき、それは物語終盤においても固定化されることがないのである。

参木にとっての〈死〉とは、物語中において変容する。それは無意味であり、愛国心のためである。そして、そのどちらもが無名の〈死〉であり、人間としての尊厳を喪失している。つまり、無名に対しての有名とは、固有の尊厳の有無と換言することができる。笠井は、法秩序というものが固有の名前というアイデンティティをもつ一個人のみをその支配下に置くことができるとし、「固有の名前をもたない私とは、法秩序の外部に逃される空虚な私である」と述べている。つまり、暴徒という法秩序を破壊する集団によってもたらされる〈死〉とは空虚であり、まるで意味のないものである。

では、無名の〈死〉とは反対に有名の〈死〉とは参木の中に存在するだろうか。

参木にとっての自分の身体とは、自分のものだけではない。それはテキスト一章にも表れている。

が、彼はその真似だけはやって来た。しかし、彼の母が、彼の頭の中に浮かび上がると、またその次の日も、朝からズボンに足を突き込んで歩いていた。

――俺の生きているのは、孝行なのだ。俺の身体は親の身体だ、親の。俺は何んにも知るものか。――

参木は自身の身体を母のものであると考える。参木にとって元より自分の身体は自分のものではないのである。だからこそ彼は自らの身体に自ら〈死〉をもたらすことができないでいる。参木の身体は日本から離れていてもなお、日本にいる母に引き渡されている。また参木は自分の身体が日本そのものであるとも三五章にて意識する。

彼は再び彼自身が日本人であることを意識した。しかし、もう彼は幾度自身が日本人であることを知らされたか。彼は母国を肉体として現していることのために受ける危険が、このようにも手近に迫っている此の現象に、突然牙を生やした獣の群れを人の中から感じ出した。

このことから参木という存在は、仮想的に日本に存在すると言える。参木は上海にいながら、日本人であるというラベルを剥がすことができない。この国籍の絶対性は、作中において揺らぐことがない。しかし参木は日本人であることから逃れようとする。そして彼は「本能のままに自殺を決行しようとしている自分に気がついた」のである。本能のままの自殺とは何か。参木は思考を続ける。

彼は自分をして自殺せしめる母国の動力を感じると同時に、自分が自殺をするのか自分が自殺をせしめられるのかを考えた。しかし、なぜに此のように自分の生活の行くさきざきが暗いのであろう。彼は自分の考えることが、自分自身で考えているのではなく、自分が母国のために考えさせられている自身を感ずる。最早や彼は彼自身で考えたい。それは何も考えないことだ

。彼が彼を殺すこと。――

参木は母国のため、自己犠牲の精神でもって自殺を試みようとしている自分に気がつくのである。それに対して彼は「何も考えないこと」で抵抗し、そうすることで自身を取り戻そうとする。しかし「何も考えない」という消極的行動は自身を殺すことと同義であり、参木は〈死〉によって自己の回収を行おうとしているのである。

参木にとっての有名の〈死〉とはここにある。日本という母国の存在を考えず、またそこから日本の母から自らの身体を取り戻すのである。参木の身体に参木が保存される。しかしこの参木は「何も考えない」。「彼が彼を殺すこと」で参木ははじめて名を獲得する。参木は「何も考え」ずに自らを殺すことによるのみ、有名の〈死〉を手にするのであり得るのである。

しかし参木はそれに徹することができない。愛国心と、母国の親から逃れられないのである。そしてその鎖は芳秋蘭との別れによってより強固なものとなる。参木にとって異質であった芳秋蘭の退場は、彼に空白の補填を要求する。それは愛国心であり、パン、つまり生きることなのである。そして最後にはその二つを埋めることができる、お杉の下へ参木は向かうのである。

参考文献

参考文献

山本亮介 『横光利一と小説の論理』 (笠間書院 二〇〇八年 二月)

笠井潔 『探偵小説と二〇世紀精神 ミネルヴァの梟は黄昏に飛びたつか?』 (東京創元社 二〇〇五年 十一月)

笠井潔 『探偵小説論 1 氾濫の形式』 (東京創元社 一九九八年 一二月)